

幼児・児童の構成表現とその指導法

会津大学短期大学部

幼児教育学科

葉山 亮三

幼児・児童の構成表現とその指導法

葉山 亮三

平成29年1月10日受付

【要旨】本研究は今日求められる幼児、児童の表現の中で、特に構成表現について考察するものである。

具体物を描き、もしくは表す具象表現とともに、抽象的な造形表現も重要な造形表現の一つである。抽象表現は具体的な何かをイメージして造形する具象表現とは異なり、形を組み合わせる展開を広げていく表現技法である。このとき、特に構成によって作品作りを展開する。幼児、児童の発想力を高める上で、この構成表現はイメージを広げて制作していくことから、効果的であると考えられる。近年の造形活動を考える上で、注目すべき言葉がある。それは「めざす造形」と「さぐる造形」という言葉である。「めざす造形」は文字通り形を「めざす」ものである。あらかじめ描いたり作ったりするイメージを明確にして、それに近づけるように計画的に制作する。これに対し「さぐる造形」はその場で発見したもの、素材、環境から、子どもが発想を巡らせ、自ら挑戦していけるような活動である。構成表現はこの「さぐる造形」として感性の育成に役立つと考えられる。これらを踏まえ、構成表現による造形とその指導法を模索するため、2016年福島県会津若松市、喜多方市にて幼児、児童への実践を行った。これらの実践事例をもとに構成表現とその指導法について考察を加える。実践の作品事例から、発想の展開の様子を得ることが出来た。またアンケートの結果から、環境構成の重要性、実践の場の必要性の高さ、学習効果を確認することが出来た。

1. はじめに

本研究は今日求められる幼児、児童の表現の中で、特に構成表現について考察するものである。

具体物を描き、もしくは表す具象表現とともに、抽象的な造形表現も重要な造形表現の一つである。抽象表現は20世紀初頭から広まりを見せ、平面作品についてはカンディンスキー、モンドリアン、立体作品についてはアルマン、ティンゲリー、カルダーらが提唱し、理解を得ている。このような抽象表現は具体的な何かをイメージして造形する具象表現とは異なり、形を組み合わせて展開を広げていく表現技法である。このとき、特に構成によって作品作りを展開する。幼児、児童の発想力を高める上で、この構成表現はイメージを広げて制作していくことから、効果的であると考えられる。これらを踏まえ、構成表現による造形とその指導法を模索するため、2016年福島県会津若松市、喜多方市にて幼児、児童への実践を行った。これらの実践事例をもとに構成表現とその指導法について考察を加える。

2. 感性教育としての構成表現

日本の造形教育観は、古くは学ぶは真似ぶにある。江戸時代に行われた寺子屋での教育は、手本を爪でなぞり、転写して筆で描き上げる写し絵である。明治期に入り、1872年の学制公布とともに始まる学校教育によって、造形教育の内容は徐々に変化してきた。

近年の造形活動を考える上で、注目すべき言葉がある。それは「めざす造形」と「さぐる造形」という言葉である。「めざす造形」は文字通り形を「めざす」ものである。あらかじめ描いたり作ったりするイメージを明確にして、それに近づけるように計画的に制作する。最初のイメージを「めざす」のである。これは折り紙などがわかりやすく、作例に合わせていくものである。ここで重要視されるのはイメージを形にできるのか、という「結果」である。これに対し「さぐる造形」とは何であるか。その場で発見したもの、素材、環境から、子どもが発想を巡らせ、自ら挑戦していけるような活動である。色や形を並べたり、繋げたりしながら、その子ならではの造形的な発想を育てていく。文字通り、造形を「さぐって」いくのである。この活動が重要視するのはその活動の道程である「過程」である。

「結果」を重要視するためには制作手順など、正しく行う「技術」を習得する必要がある。「過程」を重要視するとその場で子どもが出会った出来事に対する「感性」を大切にしなければならない。「技術」と「感性」、どちらも造形において重要な項目であるが、幼稚園教育要領の15のねらいより、下記する表現の3つのねらいと照らし合わせて考察する。

- ① いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- ② 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- ③ 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

上記のねらいから、①については「豊かな感性を持つ」と締めており、感性の重要性が唱えられている。また②、③について、どちらも最後は「楽しむ」という言葉でまとめている。「楽しむ」ということは制作の結果というよりは過程に起きやすい気持ちである。これにより筆者は今日的な造形教育の形として「めざす造形」と「さぐる造形」この2つの造形を相互に取り入れつつ、特に「さぐる造形」を意識した教育普及が求められていると考えている。

構成表現はあるものを利用して表現する。自ら自由な線で描く絵画表現や、自らの手で自由な形を作る粘土造形のような造形表現とは異なるものである。あるものを利用する以上は、そのものを知るために「さぐる」必要がある。そのため、構成表現は「さぐる造形」であり、感性の育成に役立てられると考えられる。

3. 実践事例の検証

2016年、福島県会津若松市ツタヤ神明通り店、本学キッズカレッジにて「つないでつくろう！あか・あお・きいろ」福島県喜多方市エコードにて「おるってなんだろう、やってみよう！ぬのづくり」「まつぼっくりでクリスマスリース！」、福島県会津若松市ツタヤ滝沢店、福島県会津若松市アピタ会津若松店にて「クリスマスカードづくり」の実践を行った。これらの活動内容を振り返り、構成表現の造形の流れ、それに即した指導法を検証する。

なお、「つないでつくろう！あか・あお・きいろ」「おるってなんだろう、やってみよう！ぬのづくり」「まつぼっくりでクリスマスリース！」「クリスマスカードづくり」については平成28年度会津大学競争的研究費「リピテーションによる造形表現、及び教育普及」について助成を受け、実施した。

① 「つないでつくろう！あか・あお・きいろ」

2016年8月福島県会津若松市ツタヤ神明通り店、また2016年11月本学キッズカレッジにて「つないでつくろう！あか・あお・きいろ」を幼児、児童に向け実践した。本プログラムは木片を染色し、赤、青、黄、黒、無地のピースを用意し、木工用ボンドで接着して行う構成表現である。アンソニー・カロの立体作品を参考に、ただ積み上げる積み木あそびから発展した造形表現となるように留意して指導に当たった。留意点としては制作者の視点に注目し、年齢に合わせて、様々な角度から対象を考察することでより複雑な造形へと展開を見せた。特に11月に行ったキッズカレッジでは、実践を参加者全員で一斉に行う授業形式をとったことで丁寧な導入を心がけた。具体的にはグループで順番に木片を積み上げる積み木遊びを行い(図2参照)、形やバランスについて、グループ内で発想を刺激しあっていた。また積み木遊びは4歳前後から行われる構成遊びの一つであるため、構成表現の導入としては効果的と考えた。



図1 用意された木片



図2 グループによる積み木あそび

図3は幼児の制作の様子である。木片を手前から順に並べるように立ち上げて制作していった。まだ、空間認知の進んでいない幼児は、始めから全体の空間を意識して進めるというより、順を追って、全体に積み上げて制作していった。気に入った形を、色の木片を次はどうしようかと考えながら進めていくのである。これに対し、図4は児童の制作風景である。土台となる板材に対して、全体感をともなって制作している。その場所に応じた色、形の組み合わせを考えて構成すると同時に、全体にも意識を向けて制作していることが伝わってくる。このように同じ構成表現であっても、子どもの発達に応じて表現の意識が異なるため、子どもに応じた指導が必要となる。

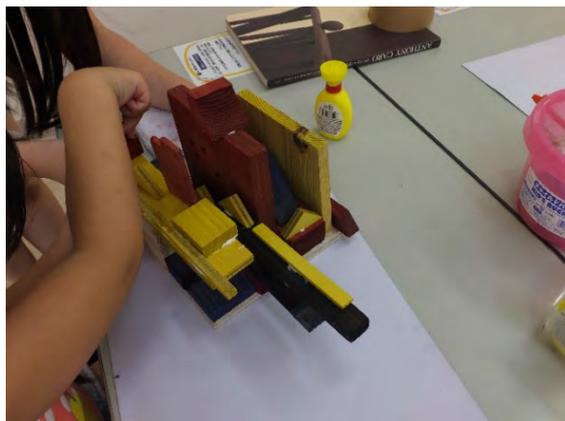


図3 制作風景①



図4 制作風景②



図5 完成作品①

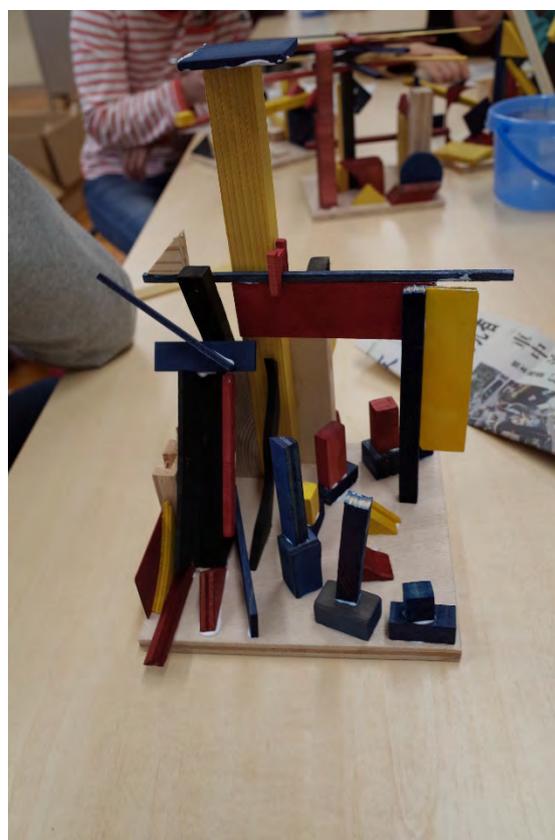


図6 完成作品②

図5、図6は作品の完成図である。一般的な積み木と異なり、木工用ボンドを用いて接着することで、重力に対してより緊張感のある構成が可能となった。色と形を組み合わせ、建造物や街並みのように一つの空間を構成することが出来た。参加者アンケートの自由記述欄からは「木材という普段扱わない素材がよかった」「自分で考えて作れたことがよかった」「難しい分できたうれしさがあった」との結果を得た。表現における魅力として、素材との触れ合いとともに、考えて構成することの喜びと、その充実感が子どもたちにも伝わったと考えられる。また保護者からは普段より、とても集中しているとの意見があった。日常に対し、非常に考えて制作することで充実した成果を出すことが出来た。

② 「おるってなんだろう、やってみよう！ぬのづくり」

2016年10月福島県喜多方市エーコードにて幼児を対象に「おるってなんだろう、やってみよう！ぬのづくり」を実施した。エーコードは社会福祉法人啓和会が運営するギャラリーであり、障がい福祉サービス事業所である。本施設では障がい者の作品として織り機で織った布の作品がある。またテキスタイルは絨毯などに見られるように、色と形を組み合わせた構成表現である。これらの作品を参考に、簡易な織り機を用意して布を織る作品作りを行った。



図7 用意された材料（毛糸）



図8 制作風景

図8は制作の様子である。縦糸に好きな色を選び、様々な色、種類の毛糸から横糸を選んで制作する。横糸は好きな色を選んでいるため、始めはその色1色で完成させようとする子どももいたが、織り進めると色を変えてみたいと、気持ちが変わっていった。1色では単調な布作りもこうして素材や色が組み合わせることによって構成された作品となる。



図9 完成作品①



図10 完成作品②

単純な作業ですぐには完成しない布作りであったが、徐々に出来上がっていく様子に子どもたちは満足度が高かったようである。糸を組み合わせることで面としての布が出来上がることを体験できたようである。また、糸を実際に並べて、配色を考えることで、ただの好きな色の集まりではなく、色の組み合わせを考えた構成作品となった。このことから、指導においては織り方の手順もあるが、色の組み合わせを並べて見せることで、子どもに配色の効果を体験してもらうことが重要である。また苦勞して作り上げた作品は大切なものへと価値が変換される。後日、子どもがずっと大切に布を持っているとの情報を得た。制作活動によって物の価値を変えることが出来るのは造形表現の魅力であることも結果を得た。

③ 「まつぼっくりでクリスマスリース！」

2016年12月福島県喜多方市エーコードにて幼児を対象に「まつぼっくりでクリスマスリース！」を実施した。松ぼっくりはリース作りの材料としてよく用いられる。今回は円形の土台に使用済みのテープ芯を用いた。これによって、一般的なリースに比べ、高さが出やすく、より発展的な構成表現としてのリース作りを提案すべく企画した。



図11 用意された材料



図12 制作風景



図13 制作過程



図14 完成作品

材料の松ぼっくりは大小様々なサイズに加えて、金、銀、赤、緑等の色をスプレーしたものも用意した。豊富な材料から選んで組み合わせていくことで、形と色を考えた構成表現となる。接着にホットボンドを用いることで、硬化の待ち時間が短く、構成の展開がテンポ良く行えるよう配慮した。図13の制作過程を見ると様々な大きさの松ぼっくりを使っていることがわかる。子どもは材料を選んだ後、実際に置いてみてその材料を使うのか、違うものに変えるのか取捨選択して制作していた。その結果単純なバランスではなく、様々な大きさの形を組み合わせることで造形することが出来た。仕上げの飾りを接着することで、高さのある非常に装飾的なリースを完成させることが出来た。このリース作りにおいて、子どもは材料を接着する時間より、材料を選んで取捨選択する時間を多く必要とした。ものを選ぶ、構成を考えるということが主体となった造形活動といえと同時に、結果の形からは伝わり難い制作過程の考えるという工程が、子どもの発想に影響を与えていることが明確となった。

④ 「クリスマスカードづくり」

2016年12月、福島県会津若松市ツタヤ滝沢店、福島県会津若松市アピタ会津若松店にて「クリスマスカード

づくり」の実践を行った。クリスマスの季節に合わせて、飛び出す仕掛けを利用したメッセージカードを色画用紙、シール等を用いて制作した。クリスマスツリーの基本となるモミの木は4種類のサイズの直角二等辺三角形の緑と黄緑の色画用紙を用意した。この組み合わせによって、大きさ、色、形を自分たちで考えて構成することになる。また、カードの主調色となる背景を選び、シールや色紙を使ってアクセントを装飾することで、より構成作業の内容を深めるべく企画した。



図15 制作過程①



図16 制作過程②



図17 完成作品①



図18 完成作品②

カード作りにおいて、まずはモミの木から制作した。単順に大きなものから順に三角形を張り合わせて作るかと思われたが、使う枚数や形、色の選び方によってバリエーションが広がった。また、図18のように傾いた形も制作された。単純な制作が予想されるものほど、その導入、環境準備は重要である。今回、試作品のバリエーションを意識して制作したが、その効果が実感できた。試作は真似る対象ともなるが、バリエーションを見せることで、どのように応用してもいいということを伝えることが出来る。モミの木を仕上げ、背景を貼ると、後は装飾である。型抜きした色紙、シールを用いてカードをにぎやかに装飾する。特にシールを貼るという活動は子どもが好む活動である。注意しなければ貼ることを楽しんで夢中になり、構成としての全体の表現から意識が離れることがある。今回、シールは10枚までとすることで、シールの貴重性を意図的に高めた。これによって大切なシールをどこに貼るか、じっくり考えて構成して表現する冷静さを取り戻すことが出来た。今回の実践はこのような指導の配慮によって、子ども造形が変化することを実感できるものとなった。

4. 結果と考察

今年度行った造形実践について、実施が可能な範囲において参加者にアンケートを行った。幼児に関して、回答が難しい場合は保護者の方とともに回答を求めた。有効回答数は46件であった。質問の共通項目として以下の内容を5段階で返答を求めた。もっとも良い評価を5、次によいものを4、どちらでもないものは3、あまりよくないものを2、よくないものを1として表にまとめている。

- ① 造形ワークショップに参加してよかったか
- ② このような学習機会があれば次回も参加したいか
- ③ 感性の育成に効果があると感じるか

結果は以下のである。

	5	4	3	2	1
造形ワークショップに参加してよかったか	46 (100%)	(0%)	(0%)	(0%)	(0%)
このような学習機会があれば次回も参加したいか	45 (97.8%)	1 (2.2%)	(0%)	(0%)	(0%)
感性の育成に効果があると感じるか	41 (89.1%)	4 (8.7%)	1 (2.2%)	(0%)	(0%)

結果として①に関しては全ての参加者から、②、③についても高い評価を得ることが出来た。当日の活動についてだけでなく、学習機会としてのワークショップ実践の継続的な必要性を実感するに至った。自由記述欄からも今後も参加したとの記述が随所に見られた。また感性の育成に関して、このような構成表現が一定の効果を実感しうるものであることが明確となった。

また、参加してよかった内容の細目について、複数回答可で返答を用いたところ以下ようになった。

制作活動の魅力	45 (97.8%)
材料、道具の魅力	28 (60.9%)
スタッフの対応	28 (60.9%)

制作活動の魅力が高い評価を得たが、続いておよそ60%の回答から、材料、道具の魅力、スタッフの対応について評価を得ることが出来た。構成表現は単純な形の構成によって表現される。そのため、使用する材料選びも制作の一環であると考えられる。この要望に応えるため、必要十分な材料を用意することが重要と考えていたが、このアンケート結果からもそれを裏付けることが出来たと考えられる。また、スタッフが臨機応変に子どもと接することで、発想の展開を伸びやかにする。これらの事前準備が制作活動の魅力に相互作用を与えていると考えられる。また自由記述欄からは材料、道具の準備の難しさから、家庭ではなかなか行えないため、このような実践の場を求める返答も複数得られた。

今年度の実践を経て、子どもたちの構成表現は発達段階、そして個々に応じて様々な表現の広がりを見せた。この多様性は手本を「めざす造形」ではなく、形を「さぐる造形」として、構成表現がなされるからであると考えられる。子どもたちの造形過程の探りをより充足にするための材料、道具等の事前準備、当日の指導としては単一ではない、選択肢のある環境構成がこれを促していると考えられる。また、そのための準備は負担ではあるが、だからこそ学習の機会として有効であり、様々な造形体験との出会いを通して子どもの育みとなる。今後も継続的に実践を行うことで、これらの効果をより明確化していきたいと考える。

参考文献

藤江 充・佐藤 洋照 (2011) 『図画工作科研究』日本文教出版

- 磯部 錦司 (2013) 『子どもとアート小学館』
文部科学省 (2008) 『幼稚園教育要領』
多鹿 秀継 鈴木 眞雄 (2000) 『発達と学習の心理学』
辻 泰秀 (2014) 『幼児造形の研究』 萌文書林
渡辺 一洋 (2015) 『幼児の造形表現』 ななみ書房
吉本 和子 脇淵 爾良 (2014) 『積木と保育』 エイデル研究所